

寄稿論文

ジョン・デューイの探究概念を手がかりにした

生涯学習と図書館の交差点

根本彰[†]

[†]東京大学名誉教授

生涯学習と図書館を関係付ける根拠を探るために、ジョン・デューイの探究論と図書館情報学の知識論を検討する。ジョン・デューイは独自のプラグマティズム哲学を確立し、探究共同体においては、参加者が生涯を通じて探究方法を習得し、それを継続的に洗練させることが、相互成長を促し自由で知的な活動を生み出されることを強調した。その経験と探究の哲学の前提条件として、古典的な人文学の考え方である「人文主義(humanitas)」があり、これはドキュメントの存在を前提とした文献学的側面をもつ。ここから、ピアウア・ヤアランのドキュメントを介在させた知識組織論とデューイの探究論との関係性を考察した。

キーワード：ジョン・デューイ、探究、生涯学習、ピアウア・ヤアラン、ドキュメント、図書館

1 はじめに

東京大学教育学部教育行政学科は 1949 年の学部成立以来、教育行政学、社会教育学、図書館(情報)学の 3 研究室(講座)によって構成されていた。国の大学院重点化と高度専門職業人育成政策を前提にして、2009 年度から教育学部は 3 専攻 7 コースの大学院教育学研究科に組織変更し、その際に教育行政学研究室は新しくできた学校教育高度化専攻に移った。残された 2 研究室は、一緒になって新しい組織名を名乗ることになり、生涯学習基盤経営コースはそのとき成立した。

新コースの性格と名称をどうするかについて、「生涯教育論」とか「学習社会論」といった候補もあったのだが、現行のものに決めた。しかしながら、必ずしもじっくりくるものにならなかった。なぜこの名称を選んだのかについて、いずれ書かなくてはならないかとも思うが、本稿では 2 研究室が前提とする理論的接点はどこにあるのかについて考察しておきたい。開設後すでに 15 年以

上、また、筆者自身、ここを離れてから 10 年以上が過ぎても気になっていたことの一端について見通しをつけておきたいと思う。

まずプラグマティズム、とくにジョン・デューイの探究概念が手掛かりになると宣言しておこう。社会教育研究室の初代教授宮原誠一が訳したジョン・デューイ著『学校と社会』(原著 1899)は、1952 年に春秋社から出て、5 年後に岩波文庫に入り現在に至るまでロングセラーを続けている。この本は戦後教育をリードしたデューイの経験主義教育論を分かりやすく説いた本として知られているが、デューイがシカゴ大学で担当した実験学校の記録でもある。そこにはデューイが考える学校のモデル図が含まれていた。学校は 2 階建て構造で示され、1 階は生活や労働をベースにした学びの空間になっていて中心に図書室(Library)が置かれている。2 階は科学や美術・音楽の学びの空間であり中心に博物室(Museum)が置かれている。また、学校は地域の大学や研究

施設、図書館、博物館といった施設と関わるものが図示されている。

学校は地域と学術に開かれた探究的な学習を行う場として表現されている。当時、図書館や博物館関係者は学校の内部と外部がこのような布置で示されたことに意を強くした。とくに図書館関係者は社会教育や学校教育に図書館が政策的に位置付けられるとの期待をもった。しかし、実際に検討されたのは占領期にとどまり、講和条約後の国の教育政策に十分に反映されることはなかった。

戦後 80 年あまりが過ぎて、一旦、系統主義に振れた国の教育課程は現在、デューイの経験主義に戻りつつあるように見える。しかし、学校モデル図に示された図書室や博物室は、近年の学習指導要領上で言及がないではないが、学校の中心に置かれているわけではない。日本で言う探究学習を英語で inquiry-based learning などと表現しているが、problem-solving methods とか project-based learning などと呼ばれることもある。探究学習とは系統主義的な教育課程に探究的な要素を入れただけのもののようにも見える。そもそも、デューイの言う探究 (inquiry) と現在の教育課程行政で言われる探究学習はどういう関係にあるのかについて突き詰めた議論はされていない。

以下、本稿ではデューイを出発点とするだけでは分からない西洋思想史における知のとらえ方の基層部分について検討することで、教育と図書館の関係について考察し、生涯学習基盤経営という概念の理解を深めたい。¹

2 デューイの「世界知」のとらえ方

『学校と社会』の図の 1 階部分について、デューイは次のように説明している。²

[図書室は]子どもたちのさまざまな経験、さまざまな問題、さまざまな疑問、子どもたちが発見してきたいろいろな具体的な事実をもち込んでくる場所になるだろう。そこで [中略] とりわけ他者の経験からくる新し

い光、集結された世界の叡知—それは図書室に象徴されているものであるが—というもののからの新しい光が、投げかけられる場所である。

日本に限らず、教育学においてデューイの経験主義を取り上げるときには、ルソー以来の子どもが自然で自立的な発達を自らの経験を通して実現する局面を重視してきた。19 世紀まで子どもの発達は所与のものとされ、その子どもの能力や生まれた家の資産や社会的条件、親や家族の考えなどに対応した教育を行うことを前提としてきたものに対して、新しく起こった産業主義と国民国家的なものが求める人間像が普通学校のカリキュラムに反映された。そこでの教授学やカリキュラムのエッセンシャルイズム (普遍主義) に対するアンチテーゼがデューイの経験主義に基づく教育観を構成する。

デューイが言う経験をここではひとまず子どもたち自らが学校内外で体験することと理解しておけばよいだろう。体験したこと、発見したこと、そして、そこで抱かれた疑問や問題点が教室に持ち込まれる。実は体験が発見になること、そこから疑問や問題点につながることで自体が探究の過程を経ているわけであり、それはこの後述べることである。デューイは、従来型の学校では古典的文章の復誦 (レシテーション) が重要であったことに対して、この図書室は復誦室ではなく、子どもたちの経験に対して世界の叡知という光を当てる場であると述べる。復誦はカノン (正典) とされる文章を暗記することであり、19 世紀までの教育方法として一般的であったが、これを否定している。続いて次のように述べる。

ここには理論と実践との有機的な関連がある。子どもは、たんに物事を為すというだけでなく、子どもが為していることについての観念もまた、獲得するのである。すなわち、子どもの実践にはいり込み、その実例を豊かなものにしてくれる、ある種の知的概念を当初から獲得してかかるのである。他方、

あらゆる観念は、直接的であれ間接的であれ、経験のなかでなんらかの応用を見つけ出し、生活のうえになんらかの影響を与えるものである。いうまでもないことだが、このことが教育における「書物」あるいは読書の地位を決めることになるのである。書物は経験の代用物としては有害なものであるが、経験を解釈したり拡充したりするうえでは、このうえなく貴重なものである。

書物が経験の代用物として有害と述べているのは、正典としての書物を経験以前に押しつけるのではなくて、子どもたちが経験したことを豊かにするための素材を参照しながら自らの知的概念を作り出すことが重要であるとするからである。経験には直接的なものと同接的なものがあり、間接的なものなかで、他者の経験が詰まった書物をそれらが集積された図書室で読むことが従来の学習法に対する批判となるということである。図書室で“他者の経験からくる新しい光、集結された世界の叡知”をもとに経験を解釈したり拡充したりすることについて、筆者はこれを「世界知」と名付けて論じたことがある。³

多くの教育学者はこの部分について、授業における教材論につながる議論だと考えるだろう。デューイにおいて教材は最初から用意されるものではなくて、教員が学習者に対峙するとき結果的に抽出される概念である。『学校と社会』はデューイが学校教育にコミットした彼の中期の著作であるが、同じ頃に書かれた『子どもとカリキュラム』（1902）が講談社学術文庫版で一緒に翻訳されている。これを見ると、デューイは“子どもの現在の経験にはいり込んでくる事実や真実、および教科学習での教材に含まれている事実や真実というものは、一つの現実を表わす上での最初にして最後に使われる用語にほかならない”⁴（p.274）と述べて、その途中の過程の考察が重要であることを強調する。だから教材は“外部から真理を押しつけるようなことはありえない”（p.303）。⁵ここで教材の原語は subject matter であり、主体形成に関わることを意味する。学習者

が思考を行い認識するための具体的な素材であり、多様なものが含まれる。それは学習者の好奇心や発見の意欲を引き出し、それによって観察し、聞き、触れる経験が学習者自身のこれまでの経験と結びついて次の行動につなげるものである。⁶

学校における図書室（以下「学校図書館」と呼ぶ）が、子どもたちが体験してきたことを他者の経験とすり合わせて、自らの問題の発見や解決につなぐ場となるとすれば、そこに置かれた書物はどのような意味での教材なのか。この問いは書物が図書室に置かれて、世界知を媒介するデューイ的意味での教育の場になるためにはどのような条件が必要なのかと言い換えてもよい。この問いに対して、デューイ自身はあまり考察のてがかりを残してくれていないが、『学校と社会』以外にデューイが図書館について述べた文章がただ一つある。それは、ヘンリー・ブリス（1870-1955）が執筆した分類法の理論書 *The Organization of Knowledge and the System of the Sciences* (1929) にデューイが寄せた序文である。⁷ブリスはニューヨークシティ・カレッジの図書館員を長く務めながら分類の理論研究とそれを体現した書誌分類法 (Bibliographic Classification) の開発に取り組んだ人であった。本書は図書館の分類法が学術的な営為と密接な関係をもつことを厳密に記述しようとするものであった。デューイは序文で次のように述べる。

知識は専門化された断片の増加によって成長する。しかし、専門的な職業人が自分のやっていることの関係や意味に気づかないことがないように、つまり最終的に混乱を招かないようにするには、包括的で統一的な原理に基づいた中心的秩序がなければならない。しかし、その秩序は、新しい予期せぬ発展に適應できるほど柔軟でなければならない。この広範で自由な精神の結果、ブリス氏のこの著作は、図書のサービスに直接携わっている人々にとって特別な価値を与えるものであり、生活における無秩序と混乱から秩序と統一に移行する際の、知識の組織化と相

互関係の影響に関心を持つすべての人々にとっても重要である。多様な材料を利用して複雑な問題に知的に協力しながら集団で取り組むことは、現代生活の顕著な動きである。(p.viii)

この時期のデューイは経験や探究のような個人ベースの認識論的な概念をより一般化して、社会問題に適用するためのさまざまな活動にコミットしていた。ここでは、図書館が果たす知識組織化の働きが、生活における秩序と統一、そして知的協力のための集団の取り組みに貢献している。図書館が社会で知識を媒介するための存在であることは、大学に籍をもつ人ならだれでもがもつ考え方であったが、ここではデューイはもっと踏み込んで、自らの経験と探究の理論の延長上に位置付けようとしている。

だが、それをさらに哲学的あるいは教育学的に明らかにしようとはしなかった。だから、通常の経験主義教育学の教材論は、教員が子どもたちの経験を引き出すための教材教具をどのように準備するのかという視点に立ちがちである。筆者は、日本では結局のところ、本来、学校図書館の専門職員が担うべき機能も含めて、教員が授業研究や教材研究として展開してきたと考えている。⁸

3 デューイ思想の人文主義的前提

デューイが他者の経験と子ども自身の経験をすり合わせることに由来する学びに言及していることは確かである。ただ、それを見ているだけでは探究の本質は理解できない。

現在、デューイ研究は前期、中期、後期の3期に分けられ、南イリノイ大学出版局から刊行されている著作集 *Dewey's Complete Writings* も3期に分けて刊行されている。19世紀末にミシガン大学からシカゴ大学に移った中期に、彼は、プラグマティズムの運動に参加し、経験についての哲学を深めた。その際に手掛かりにしたのは、ウィリアム・ジェイムズが『心理学原理』(1890)で展開した「純粹経験」という概念であり、ヨーロッ

パ大陸の主観と客観を分ける経験概念を超えて、自らの実験主義あるいは道具主義的な立場を展開する。彼は、“為すこと (doing) と受けること (suffering) の密接な結合が我々の言う経験を構成する”と述べて、“経験とは生きることを意味する”とするプラグマティズム的な認識論を語る。何かを行えば、必ずその結果として何らかの影響を受けるし、反対に、何らかの影響を受けることは、新たな行動のきっかけとなる。デューイにとって、日常的な経験は、この「為すこと」と「受けること」が連続的につながり、意識の中で完結した「経験 (一つのまとまりを持った出来事)」となることで、意味や美的な質を獲得するものである。この相互作用のプロセスは、知識獲得の基盤ともなる。人間は環境との相互作用の中で問題に直面し (受けること)、それを解決するために行動し (為すこと)、結果を評価する (受けること) という「探究 (inquiry)」を通じて学び、成長するとした。⁹

デューイの中期から後期における経験と探究の哲学においては、自然あるいは環境は経験の源であり探究の対象であり、またそれらの背景でもある。当然、そこには世界知を記述した書物やその蓄積である図書館が含まれるが、デューイの経験と探究の哲学においてはブリスの序文以外には明示的には語られていない。だが、彼の議論が書物や図書館の存在と密接な関わりをもつことを二つの側面から見ておこう。一つは西洋思想史における人文主義的な系譜を検討することであり、もう一つは、他者の経験の表現である書物とその集合体である図書館の意義について、図書館情報学の研究を参照することである。

まず、彼の思想を西洋思想の流れに位置づけたときに、基調に人文主義があることを見ておこう。

確かに、デューイを含む19世紀末から20世紀初頭の進歩主義教育者はそれまでに浸透していたエッセンシャルリズムとしての正典主義を批判した。古典文献やテキストブックに含まれる文章や記述を繰り返して読み暗誦するという教材の扱いに対して、進歩主義は批判であり、子どもたちが自らの環境から自発的な学びの姿勢を引き

出すことを是とするものだった。しかしながら、教育方法や探究における自発性の面だけを強調することはできない。なぜなら、デューイにしても他の進歩主義教育に関わった人たちにしても、他方では西洋思想に流れる正典を重視する姿勢をもち続け、それが人々の思考の深いところに作用し、文化的な基盤を構成していることは意識していたからである。

それは西洋思想の人文主義的原理と呼ばれるものである。人文主義は英語にすると humanism となり、人間主義のような一般的な意味に解釈されることも多いが、もともとラテン語フマニタス (humanitas) から来ていて、古代ギリシアやローマの市民にとっての知の系譜を形作っていたものを復興させて学ぶ態度であった。人文主義の思想は、ルネサンスからバロック期に活躍したエラスムスやペトルルカから知識人の活動の源泉になったもので、古代ギリシアやローマの古典を学ぶことによって人格形成を目指すものだった。人間を学問の中心に据え、人間の生きる道を求めて、ギリシア語やラテン語の古典の系譜を研究し、そこに含まれる思想から学ぼうとした。¹⁰

人文主義を支える方法として、文献学 (philology) がある。これもきわめて多義的な用語であって、領域によって独自の捉え方がされる。だが、もともと「ロゴス (言葉) を愛する」が原義であり、ロゴスを文字、語、テキスト、著作 (作品) までの側面を多面的にとらえて系譜的分析を行うもので、印欧語の言語的系譜の研究から古代ギリシア、ローマの古典文献の書誌学的研究、文芸作品の通史的な特性の分析などが行われている。¹¹ 法制史学者木庭顕が言うように、人文主義は西洋における法や、政治、そして人文諸学の基本的な方法として組み込まれていた。彼が言うクリティックは、一連の言説から弁証法的対立を析出することで新しい認識を導くことであり、それには、文献的根拠が重要な役割を果たす。文献学ないし考証学 (アンティークアリアニズム) は諸学的方法的基盤にあるものである。¹²

人文主義の本質について、筆者は『アーカイブの思想』において、ロゴス (logos) とパイデア

(paideia) の組合せによって、思想を継承する考え方であり、古代地中海世界に起源があるが、ルネサンスの時期に復活し一般的原理としてまとめられたことを述べた。¹³ ロゴスは言葉、とくに書き言葉によって思想を表現し、そのやりとりによって思考を高め、共同体において共有されるものであり、パイデアはそれを時系列で継承するための考え方である。これを維持発展させる知識人が交流する場としての仮想コミュニティが「学問の共和国 la République des Lettres」であった。彼らはそれに所属し、初期には共通語たるラテン語の書簡をやりとりすることで議論し、その後には書物にまとめた。国民国家の枠組みができてくればそれぞれの国語による書物、学術雑誌や新聞 (高級紙) を舞台に議論をした。¹⁴ そして、学術的そして社会的な知的所産たる書物や雑誌・新聞の歴史的な継承を可能にするのがアーカイブ装置たる図書館や文書館であった。とくに図書館は、国家、大学、都市に必ず設置されて、何らかの共同的组织や機関を維持発展させるもっとも基本的な文化資源の蓄積と利用の場であった。その帝國的モデルはヘレニズム時代に帝国の庇護を受けて学問所ムセイオンにつくられていたアレキサンドリア図書館に求めることができる。

人文主義は 19 世紀になると人文学 (humanities) として大学教育にも取り入れられていく。18 世紀後半以降、実証科学的なものが始まった時代にドイツの大学で広く行われたものにゼミナールがある。これは現物資料を用いた専門教育で、自然科学系だと実験室 (laboratory) で機器や器具、試薬を使った操作をすることであり、法学や人文学では専門図書コレクションをもって文献購読と討論を行う方法が取り入れられた。人文学の教育法でゼミナールは、人文主義の影響を維持していたことを示している。1876 年にアメリカのボルチモアにジョンズ・ホプキンス大学が開学した。ドイツの大学の研究教育法を取り入れたところであり、初代総長ダニエル・コイト・ギルマンは“最高の教師とは、図書館や実験室で独創的な研究を行う自由と能力を持ち、意欲的な人である”

と述べたとされる。¹⁵これ以降、アメリカの大学にゼミナール法は広く普及した。

デューイは、1882年にジョンズ・ホプキンス大学の大学院に入ってここで博士論文（「カントの心理学」）を執筆している。また、初期の研究にはヘーゲル哲学を論じたものもある。彼もまたドイツ哲学や心理学を通じて人文主義の薫陶を受けたといえる。だが彼が中期以降に選択した哲学的立場は、パースのプラグマティズムだった。プラグマティズムは概念や認識をそれがもたらす効果や結果から考察する認識的立場であるから、ドイツ哲学の歴史主義や文献学的な部分について学んでいたとしても強調することはなかった。

以上のことを踏まえれば、デューイの経験論的教育学においても、教材と表現される学習者の経験の総体を組織化するための方法として、文献学を基調にする人文主義があったと考えるべきである。それが、『学校と社会』で他者の経験の光や集結された世界の叡知を指摘する「図書室」を示すことに現れ、プリスの著作に、生活における無秩序と混乱から秩序と統一に移行する際の知識の組織化と相互関係の影響を指摘することにつながったわけである。

4 プラグマティズムと図書館情報学

先に述べたように、プラグマティズムの中心的な認識論的立場は、概念の意味や言明の真偽はその適用による経験的あるいは実践的結果を参照して評価されるとするものである。つまり、どの信念が知識として数えられるかは、実践という経験的テストにかけるとどのように機能するかをみることで決定される。概念や信念をテストすることは、経験に照らしてその妥当性を問うことである。そうした関心、目標、価値観は純粋に個人的なものではなく、より大きな社会的な枠組みの中で共有されるものであり、したがって、信念の実践的な検証には社会的な側面がつきまとう。自分と仲間にとって適切であると判断された信念は、少なくとも新たな経験が生じ、それが信念に

疑問を投げかけ、再び検証される必要が生じるまでは、個人の社会的な枠組みの中で知識とみなされるものの一部となる。

知識を媒介することを使命とする図書館情報学においても、パース以降のプラグマティズム哲学に注目して議論を展開する人たちがいる。たとえばトマス・ドゥーサは、パース、ジェームズ、デューイの3人の古典的プラグマティストの思想を比較して、図書館情報学との関係を簡潔に記述している。¹⁶ここではパースとデューイについて取り上げてみる。探究（inquiry）を初めて哲学用語として使用したのはパースと言われているが、ドゥーサは次のように述べる。¹⁷

パースは、仮説形成、演繹、帰納の三段階のプロセスを通して、探究者は信念を仮説として定式化し、経験的検証ではなく、むしろ経験的反証の欠如によってその真実性を確立できると主張した。[引用省略] このようにして生み出される真実、あるいは知識の主張は、本質的に確率的であり、異なる研究者によって異論を唱えられる可能性があるが、もし科学的方法にコミットする理性的な探究者たちの理想的な共同体の中で、無限に長い期間にわたって探究が行われれば、これらすべての探究者たちの意見は、何が真実を構成するかというコンセンサスへと収束し、それが今度は、真実を構成するものについて、より明確な結論を導き出すだろうとパースは信じていた。

科学的コンセンサスによって承認された科学的信念の集合が、外界のあり方について説明できると考えるパースの思想は、たとえば、科学が図書分類の根拠になるという意味で先に触れたプリスの分類論にも影響を及ぼして、知識組織論の基礎にもなる。ただしパースは、それが遠い未来に起こるか、全く起こらない可能性もあると想定していたのに対し、プリスはそれが既に存在しているとみなし、自らの分類法に反映させた。

ドゥーサは、デューイは知識に関して一種の「客観的相対主義」を支持し、世界における事物の概念は、その人の経験的背景、関心、そして目的によって色づけられ、それらの事物との相互作用によって積極的に形成されると考えたとする。彼によれば、デューイはプラグマティックな方法論の共同体的側面を重視し、探究を共同体生活の枠組みの中に位置づけた。デューイの共同体概念は、パースが理想とする合理的な科学的探究者たちの共同体のように抽象的かつ普遍的なものではなく、むしろ社会を構成する多様な共同体を包含するものであった。デューイの見解によれば、こうした共同体は民主主義生活の多元主義的基盤を提供し、“社会制度における積極的かつ建設的な変化”をもたらす場となった。つまり、デューイはプラグマティズムを社会に深く関わる哲学へと発展させたというのである。¹⁸

デューイのこの考え方がピアウア・ヤアランの知識組織論に多大な影響を与えたことについて、次章で検討するが、その前に、こうした認識論的議論を図書館情報学に媒介する前提として、ドキュメント論や、知の典拠性論、書誌コントロール論があることについても触れておきたい。これらについては筆者の『知の図書館情報学』で論じたのでここでは簡単に述べる。¹⁹

図書館情報学の議論は、知識コミュニケーションに物質的な媒体の存在を想定し、それらが何らかのメッセージを伴っているものとする。法や契約、備忘録や通信のための書き言葉は、やがて写本というかたちで広く普及し、印刷技術の発展によって出版物あるいは図書として扱われるようになった。さらに印刷や複製技術の発展とともに、地図や写真、楽譜やマイクロ資料、映画、音盤などを含むとされた。それが現在ではコミュニケーション技術の発展によってデジタル化されてネット空間で交換することが可能になったことにより、あらゆるメッセージはデータとしてやりとりされている。

現在ではこれらの複雑で多様な種類の記録されたメッセージをドキュメント (document) という概念で括ることで、扱いやすくする工夫が現れ

ている。ドキュメントは書き言葉、視覚、聴覚、映像などメディア形式を問わず、一定の言説やメッセージを伝える単位となるものである。語源であるラテン語の *docere* は「教える」とか「伝える」の意味をもつ。*doctor* も派生語の一つである。図書館情報学でいうドキュメントは伝える行為を示す離散的なメッセージ単位を設定し、扱う際に何らかの質的な基準を設けて処理しやすくしたもので、処理する行為をドキュメンテーションと呼んでいる。²⁰アーカイブズ学で言うアーカイブズ (文書や記録) が事象そのものからスタートし原形のメッセージを保存しゆっくりと伝えるのに対して、ドキュメンテーションは事象を表象する行為からスタートしそこでつくられるドキュメントを外部に速度をもって伝えることを重視する違いがある。²¹

ドキュメントはコミュニケーションメッセージの単位となり一定の内容をもつメディアである。その内容は、多くの場合、著作 (work) の概念に対応する。「日本目録規則 2018 年版」では、個別の知的・芸術的創作の結果、すなわち、「知的芸術的内容を表す実体」とされる。「著作物性」は著作権の重要な要件でもあり、日本の著作権法だと思ったり感情を創作的に表現したもので、文芸・学術・美術・音楽などの範囲に属する作品とされる。単なる事実の伝達やデータは著作物性がないとされる。著作概念の展開を検討したりチャード・スミラグリアは、著作は「知識の集合体」であり、著者の意図や文化的な文脈に基づいて絶えず再構成され、具体化される実体であると述べている。²²このアイディアは「書誌記録の機能要件 (FRBR)」のような国際的な目録規則の展開に影響を与えた。知的・芸術的創作の内実についてはそれぞれの領域ごとに異なるが、少なくとも知的創作についてはここまで論じたデューイの経験と探究の過程が作用するものであることは明らかである。

書誌コントロールは図書館情報学が担ったこの状況に対して、第二次大戦後に処方箋を書くための方法的概念で、標準的な書誌データの記述規則に基づいて行う一連の作用である。個々の機関

がドキュメントのコレクションをもち、それに対するメタデータを作成してそのデータを相互に交換することで、複数のドキュメント・コレクションを同時に検索することが可能になる。これは、一般的に用いられる著者、タイトル、出版者などの要素を事前抽出したり、多くの人々が共通にもっている主題概念から取り出した件名標目を検索語としたりするものであるが、こうした方法にはプラグマティズムの観点からすると限界がある。

パトリック・ウィルソンはこうした手法を書誌コントロールの記述的コントロールと呼び、その困難性を指摘した。ドキュメントをどのように読むか、使用するのかは読者や利用者が事後的に決定するし、実際に読んだり利用したりして得られる効用は事前には分からないからである。現在の書誌コントロールは確率的に手がかりとなりそのような要素を分析対象にしているだけである。また、一旦つくられた規則やそれに基づくデータベースは容易には変更できない。彼はそれにプラグマティックな概念である実効的コントロール (exploitable control) を対置させ、書誌コントロールとはドキュメントが生産されてからそれがさまざまな経路を通してそれを使う人に伝わるまでの社会的なコミュニケーションと力学を指す総合的な過程であることを述べている。²³

また、図書館情報学はすべてのメッセージを同等に扱うのではなく、何らかの質的基準を設けて扱い方を変えていた。それは、ドキュメントの知的・芸術的創作性を評価する行為と密接につながる。その基準は歴史的には先に述べた人文主義の考え方に導かれた学問の共和国において形成されたものである。パトリック・ウィルソンは、これを知の典拠性 (cognitive authority) という概念で説明する。²⁴メッセージのなかで何らかの典拠性 (権威と言い換えてもよい) が与えられているものを優先的に扱うという考え方があるということである。歴史的には学術機関や学会、編集・出版という知の選別機構があってそれに寄り添いながらも、それぞれの図書館ごとに資料選択やコレクション形成の方針を掲げていた。これは言説のハルシネーションなどにより信頼性が失わ

れやすくメディア状況が混沌としているなかで、真正性の根拠が明示されているものを手がかりにするということである。西洋思想において図書館が人文主義の系譜に位置付けられることを示すものである。

以上、図書館も知の媒介に関与するが、ドキュメントとその書誌コントロールや知の典拠性のような考え方が展開されて、世界知への媒介を行う知識組織機関となることを述べた。その知識組織の方法についてさらに検討する。

5 探究と情報探索—デューイとヤアラ ン

20 世紀の教育哲学の焦点の一つはデューイの探究概念であったことについて、筆者はすでに『知の図書館情報学』で述べた。デューイは 1938 年の『論理学：探究の理論』で、探究を“不確定な状況を確定した状況に、すなわち、状況を構成している区別や関係が確定した状況に統制され方向付けられたように転化させることで、もとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えることである”と定義している。彼にとって探究とは、問題解決をめざして展開される知的活動のことであるが、観察、推理、推論という思考 (thinking) の過程で、経験から得られた状況についての観念がすでに得られている概念と突き合わされながら修正されていくものである。その際に、思考活動の結果である思想 (idea) ないし思惟 (thought) は思考によって連続的に変化する。そして、思考と思惟とを常に突き合わせする過程で得られた反省的思惟 (reflective thought) が、先の定義にあった統制され方向付けられた仕方で転化させることで得られる結果である。デューイは、探究の先行条件として不確定な状況を認め、問題を設定し、仮説を形成することにより問題解決法を決定し、そこで観察されたものに基づき推論を行い、観察事実と推論から得られた意味とを対照させることを行うという一連の操作を探究のパターンとしている。²⁵

これまで、図書館情報学が本質的に情報や知識自体を目的とするのではなく、知識獲得という目的を達成するための手段として、その道具的性質を重視していることについて述べてきた。このことを哲学的な議論を基にしてより明確に述べたのがピアウア・ヤアランである。²⁶彼は 20 世紀の図書館情報学が計量情報学と情報行動論を発展させたが、そこには実証主義的限界がみられると述べ、とくに情報行動論がもつ個人を単位とする心理主義を批判した。例えば、情報探索についての行動モデルはいくつも提案されたが、そのなかでキャロル・クールソーが提案した ISP (Information Seeking Process) モデルは探索者の心の動き(感情)を重視したモデルとして高く評価された。²⁷これに対して、ヤアランは、クールソーが ISP 中の不確実性がもたらす負の感情に注目しているが、そうした情緒的側面が生じるのもさまざまな背景の要因によって説明できるから、個人主義的な情報行動を基にしたモデル化をするだけでなく、行動の社会的、倫理的、教育的な分析が必要であると述べる。²⁸

ヤアランは図書館情報学の課題の中核に、知を媒介するための図書館ないし情報システムの働きがあり、その原理を明らかにし推進するための手法を開発するための研究を行うものとする。そして、その原理に知の担体たるドキュメントの主題とそれを求める人間の行動である情報探索行動の関係を措定する。ドキュメントの主題は情報探索行動の手がかりになるものであるが、それは必ずしもドキュメントの執筆者による意図(抄録や本文中の結論部分の要約)でも、テキストの文言の第三者による要約でも、文献データベース作成者による抄録や主題標目でも表すことはできない。なぜかと言えば、彼が依拠するプラグマティズムの立場から言えば、ドキュメントの主題はそれを読み利用する人が結果的に得られるものをもとに判断することになるからである。つまり実際に読んだり利用したりして得られる効用やそこから発生する行動の結果、当該者がドキュメントを評価することによって与えられるものである。

図書館情報学で主題と訳す subject はアリストテレスのヒュポケイメノン(基体と訳すことが多い)という用語がラテン語を経由して派生した語であり、もともと「物事を構成する材料(素材)」という意味であるが、その後物事の性質(主題)という意味も派生させた。材料が属性の主題になるという逆転が生じるのは、対象は主体なしに認識されないという認識論が働くからである。ドキュメントの主題も誰が認識するか誰がそれを求めるかで異なってくるから、主題は所与のものではなく、著者が与えるものでもないし、ドキュメントに含まれるとも限られない。情報利用者のコンテキストで何が主題となるかは変わっていくと考えるべきだとする。

ヤアランはこのようなドキュメント利用者の認識はそれぞれ個別的であってもドキュメントをサービスあるいはシステムとして媒介しようとする場合には集合的な認識を基にした情報行動を想定する必要があるという。そして、そこで言及するのは旧ソビエト連邦の心理学者ウラジミール・ヴィゴツキーの活動理論である。ヴィゴツキーは人の行動の発達には生物学的発達、文化的発達、個人的発達が統一的に現れたものであるととらえたとし、これは中期から後期のデューイが行動の社会性を重視した態度と重なることが多いとしている。20 世紀の図書館情報学で盛んに研究された情報行動論は利用者が個別のニーズをもって個々の認知的判断やクールソーのように情動的な要素を把握してきた。

しかし、ヤアランはヴィゴツキーやデューイが発達や認知行動とは個々人が単独にではなく相互的ないし集合的に起こることについて論じているのに注目した。そして人々の情報探索行動もそうした広い意味での発達や認知行動の一つであるとして、ロバート・S・テイラーによる 4 段階の情報ニーズ論を再検討する。テイラーは、情報利用者は個人として心奥にあったニーズ(Q1)を意識化(Q2)し、具体化する(Q3)が、Q4の「妥協したニーズ」の段階で、情報専門家が介入して得られた情報源(ドキュメント)に結びつけることが行われる。しかしながら、実は Q1 から

Q4 のどの段階でも行動を先読みして最適な情報源を探す行為が次の探索を導いている。このように情報専門家の介入は無意識ないし暗黙のうちに利用者行動に影響を与えうる。

ヤアランは“人間の知識は対象志向的であり、探究の対象（つまり質問の性質）が発達の方向を決定するということである”と述べている。²⁹そしてテイラーの情報ニーズ論を拡張し、情報ニーズとは利用者個人が所属するコミュニティのなかで認知的発達を遂げることで明確になる点で動的なものにとらえる。科学者の探究をベースにした個人的情報行動はトマス・クーンの言う通常科学において、科学者コミュニティの集成的情報行動に集約されることになる。これは科学者コミュニティの知的発達と結びつき、科学革命を導く要因ともなる。情報専門家の介入はこのような個人とコミュニティの相互的な発達を促すものである。

ヤアランは領域毎の研究者コミュニティのドメイン分析を行うことで知識組織化システムが向上すると述べている。この議論は1997年という情報リテラシー教育が始まろうとしているときに行われていたもので、その後のネット社会の出現を織り込んで行われている。ネット社会では、すべての人は情報探索者としてみずからの主題を決定することを可能にした。つまり、研究者に限らずすべての人は潜在的に自らの知識組織を貫徹することが可能であることを示唆している。

6 まとめ—知識組織論と生涯学習

ヤアランが主張する知識組織論はドキュメントの主題とそれを利用する人の情報探索行動の相関性を表現するものだった。彼は、subject（主題）という語の基になったアリストテレスのヒュポケイメノン（基体）があらゆるものに意識を向け求めようとする行動が知識組織論の原点にあるとする。これはデューイの subject matter（教材）と同様の議論である。人はあらゆるものに視線を向けそこから学ぶことができる。つまり、ヤアランの主題＝情報探索とデューイの経験＝探究と

は類似の概念であることが分かる。ヤアランがデューイのプラグマティズムから多くを学んだということからも自然な帰結であり、知識組織論はデューイの世界知のアイディアを具体的に引き受ける可能性をもつものである。

デューイは生涯学習論の先駆としても評価されている。彼の後期の社会的探究論は、探究共同体において参加者は生涯にわたる相互成長を促進し、探究の方法をマスターし、それを洗練し続けることで自由な知性が生まれることを強調した。³⁰ヤアランは特定のドメインにおいてという限定付きであるが、知の個的発達と集成的発達の二側面が相互に関わることを促す知識組織化の手法について述べている。残された課題としては、ドメインを超えた知識組織論をいかにするかにある。³¹

最後にもう一度確認したいことは、デューイもヤアランも活かすべき経験・主題の探究ないし探索プロセスに人文主義的なドキュメント概念が含まれることである。デューイはこれを議論する機会は少なかったがその重要性を意識はしていたことについて、人文主義の伝統をもとにして述べた。知識組織論ではこの方面の議論はドメイン分析や社会認識論として展開されている。

デューイの実験学校に図書室がしっかり位置付けられたことはアメリカにおいては20世紀前半から中盤に、そして日本においては半世紀遅れて20世紀後半に、学校図書館が制度化されるのに大いに貢献した。また、生涯学習の文脈においても、読解力＝リテラシー論、独学論、ライティング教育論、地域アーカイブ論、メモリースタディーズなどでドキュメントを介したコミュニケーションに対する関心が高まっている。³²生涯学習基盤経営とはこのような背景のもとに研究されるべきものである。

注

- ¹ 本稿は、根本彰「探究を世界知につなげる：教育学と図書館情報学のあいだ」相関図書館学研究会編『図書館思想の進展と図書館情報学の射程』松籟社 2024. (《図書館・文化・社会》第9巻) p.97-150.および、それを全面的に拡張した根本彰『知の図書館情報学：ドキュメント、アーカイブ、レファレンスの本質』丸善出版,2024.に新たな検討を加えたものである。また、本稿は研究室紀要に出た次の2論考を補足するものである。大野公寛ほか「デューイの教育論における「学校」の特質:2019年度前期「生涯学習研究の理論と方法」を通してI」『生涯学習基盤経営研究』第44号 2019年度,p.31-43. 野村一貴ほか「ジョン・デューイの教育論における「社会」:2019年度前期「生涯学習研究の理論と方法」を通してII」『生涯学習基盤経営研究』第44号 2019年度,p.46-57.
- ² ここでは宮原誠一訳ではなく、市村尚久訳を使う。Dewey, John. 『学校と社会』[The School and Society, The University of Chicago Press, 1899] 市村尚久訳, 講談社, 2004, (講談社学術文庫) 第7章. (市村尚久訳) 『学校と社会, 子どもとカリキュラム』講談社, 1998, p.146. (講談社学術文庫)
- ³ 根本, op. cit., 『知の図書館情報学』 p.174.
- ⁴ ジョン・デューイ, op. cit., 『学校と社会, 子どもとカリキュラム』 p. 274.
- ⁵ Ibid.p.303.
- ⁶ デューイが教材についてまとめて論じているのは次の著作である。Dewey, John. 『民主主義と教育』[Democracy and Education: An Introduction to Philosophy of Education, Macmillan, 1916] 上巻, 岩波書店, 1975, (岩波文庫) 第14章. Dewey, John. 『経験と教育』[Experience and Education: An Introduction to Philosophy of Education, Macmillan, 1938] 市村尚久訳, 講談社, 2004, (講談社学術文庫) 第7章.
- ⁷ Bliss, Henry Evelyn. The Organization of Knowledge and the System of the Sciences. Henry Holt. 1929. Introduction, p.vii-ix. 序文は筆者のブログで訳出して公開している。「2024-12-21 ヘンリー・ブリス『知識組織論と学問体系』(1929)へのジョン・デューイの序文」<https://oda-senin.blogspot.com/2024/12/1929.html>
- ⁸ 根本彰『図書館教育論：学校図書館の苦闘と可能性の歴史』東京大学出版会, 2024, p. 248-251.
- ⁹ 以上については、Dewey, John. 『哲学の改造』[Reconstruction in History, Henry Holt, 1920] 清水幾太郎・清水禮子訳, 岩波書店, 1968 (岩波文庫) 第4章。Dewey, John. 『行動の論理学：探求の理論』[Logic : The Theory of Inquiry, Holt, Rinehart & Winston, 1938] 河村望訳, 人間の科学新社, 2013. また、錦谷光臣「後期デューイ思想における基本的概念：「経験」と「探究」をめぐる」『哲学会誌 (弘前大学)』26号, 1991, p.55-72.を参照。
- ¹⁰ ヨーロッパの人文主義については、安酸敏真『人文学概論：人文知の新たな構築をめざして』(増補改訂版, 知泉書館, 2018)が概説しているが、より詳しくは、南川高志編著『知と学びのヨーロッパ史：人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房, 2007. 村井則夫『人文学の可能性：言語・歴史・形象』知泉書館, 2016.を参照されたい。
- ¹¹ 文献学は、20世紀にエーリッヒ・アウエルバッハやエドワード・サイードを通じて復権を遂げつつある。さらに、一定の思想を広い範囲の文献に読み取る文芸批評やデジタルヒューマニティーズ的な手法にも文献学という用語が用いられることがある。根本彰『知の図書館情報学』op. cit.,p.84-87.を参照。
- ¹² 木庭顕については、差し当たって彼の『クリティック再建のために』講談社, 2022. (講談社メチエ)を参照。
- ¹³ 根本彰『アーカイブの思想：言葉を知に変える仕組み』みすず書房, 2021.
- ¹⁴ Bots, Hans et Waquet, Françoise『学問の共和国』[La République des Lettres, Éditions Belin, 1997]池端次郎, 田村滋男訳, 知泉書館, 2015.

- ¹⁵ <http://krieger.jhu.edu/about/mission/>
- ¹⁶ Dousa, T. M., "Classical pragmatism and its varieties: on a pluriform metatheoretical perspective for knowledge organization," *Knowledge Organization*, vol. 37, no.1, 2010, p.65-71.
- ¹⁷ *Ibid.*, p.67.
- ¹⁸ *Ibid.*, p.68.ジョン・ブッシュマンもまた、図書館情報学が知識そのものではなく知識を媒介する図書館的な仕組みを説明する原理として、デューイ流プラグマティズムが有効であると述べている。Buschman, John, "Once more unto the breach: "Overcoming epistemology" and librarianship's de facto Deweyan Pragmatism" *Journal of Documentation*, vol, 73, no. 2, 2017, p.210-223.
- ¹⁹ 根本彰『知の図書館情報学』op. cit., 2章, 4章, 8章.
- ²⁰ Lund, Niels Windfeld. (塩崎亮・大沼太兵衛訳)『ドキュメンテーションスタディーズ入門：記録される知の理論のために』[Introduction to documentation Studies: Complementary Studies of Documentaion, Communication and Information, Facet Publishing, 2024] 塩崎亮・大沼太兵衛訳, 丸善, 2025.
- ²¹ 根本彰『知の図書館情報学』op. cit., 「コラム2 図解・アーカイブの創造性」p. 112-117.
- ²² Smiraglia, Richard P. The Nature of "a Work": Implications for the Organization of Knowledge, Scarecrow Press, 2001.
- ²³ 書誌コントロールについては、次を参照。根本彰『知の図書館情報学』op. cit., 「第8章 書誌コントロール論から社会認識論へ」p. 152-166.
- ²⁴ Wilson, Patrick, 『知の典拠性と図書館：間接的知識の探究』[Second-hand Knowledge: An Inquiry to Cognitive authority, Greenwood Press, 1983] 齋藤泰則訳, 丸善, 2024.
- ²⁵ *Ibid.*, p.177.
- ²⁶ 以下の説明は、Hjørland, Birger, 『知識組織論とはなにか：図書館情報学の展開』[Information Seeking and Subject Representation: an Activity Theoretical Approach to Information Science, Greenwood Press 1997] 根本彰訳, 勁草書房, 2025 による。なお, 2025 年日本図書館情報学会春季研究集会での発表, 根本彰「ピアウア・ヤアラン (Birger Hjørland)の認識論と図書館情報学方法論：知識組織論の可能性」の予稿集『2025年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』<https://jslis.jp/wp-content/uploads/2025/06/202505-spring-conference-papers.pdf> およびそのスクリプト付き PPT ファイルも公開している。<https://oda-senin.blogspot.com/2025/06/birger-hjorland.html>
- ²⁷ Kuhlthau, C.C. Seeking Meaning: A Process Approach to Library and Information Services, Ablex Publishing Corporation, 1993.
- ²⁸ Hjørland, op. cit., p.141.
- ²⁹ *Ibid.*, p.208.
- ³⁰ 早川操「デューイ「社会的探究理論」が生涯教育論に示唆するもの」『教育哲学研究』52号, 1985, p.13.
- ³¹ ヤアランのドメイン分析は研究者コミュニティを理念形として組み立てられている。しかし, これを社会的な知の流通を想定する生涯学習論と結びつけるには, 社会認識論 (social epistemology) をどのように組み立てるかにかかっていると言えるだろう。図書館学の議論から始まった社会認識論が, 現在どのように扱われているのかについて, 次を参照。根本彰『知の図書館情報学』op. cit., 8章, Hjørland, Birger, "Social epistemology", *Knowledge Organization*, vol. 51, no. 3, 2024, p.187-202. Also available in ISKO Encyclopedia of Knowledge Organization, eds. Birger Hjørland and Claudio Gnoli, <https://www.isko.org/cyclo/se>
- ³² そうしたテーマの最近の日本の関連文献を挙げておく。猪原敬介『読書効果の科学：読書の“穏やかな力”を活かす3原則』京都大学学術出版会, 2024. 読書猿『独学大全』ダイヤモンド社, 2020. 松下佳代ほか編著『ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する』勁草書房, 2025. 地方史研究協議会編『「非常時」の記録保存と記憶化：戦争・災害・感染症と地域社会』岩田書院, 2023. 福間良明『戦後日本, 記憶の力学：「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社, 2020. これらは異なった領域での議論のように見えて, 生涯学習基盤経営的な視点からは相互につながりをもつ。